## 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

## 平安朝初期の訓点語に用ゐられたスラとダニ

大坪, 併治 <sup>島根大学教授</sup>

https://doi.org/10.15017/12331

出版情報:語文研究. 10, pp.11-18, 1960-05-30. 九州大学国語国文学会

バージョン: 権利関係:

## 平安朝 初期 訓点語に用ゐられたスラとダニ

大 坪 併 治

西大寺本金光明最勝王経古点十巻(春日博士による)山田本妙法蓮華経古点一巻東大寺本成実論天長点三巻

小川本・麻生文庫本・岩淵本願経四分律古点四巻

石山寺本瑜伽師地論古点十一巻根津本大乗掌珍論承和・嘉祥点一巻

山田本弥勒上生経讃古点(白)一巻東大寺本金剛般若経讚述仁和点一巻

東大寺本地蔵十輪経元慶点六巻

石山寺本蘇悉地羯羅経略疏寬平点二巻石山寺本大般涅槃経古点(丙)十巻

れるから、本稿では、右の数字を基にして論を進めることにする。えるかもしれない。ただし、両者の勢力比は大して変るまいと思は生めた程度であるから、仔細に検討すれば、右の数字はいくらか殖だのではなく、全般的な調査の間に、たまたま気付いたものを拾ひたのには、これらの資料を、スラとダニの用例を求めるために読んわたしは、これらの資料を、スラとダニの用例を求めるために読ん

故に、上代の文法を伝へただけではなく、訓点語そのものの特殊事 訓点語で、このやうにスラを多く用ゐるのは、単に伝統性の

情も手伝ってゐるやうである。

に色々な場合がある。 先づ、訓点語で、スラ・ダニの現はれる構文を見ると、次のやう

A後に「況・何況」などを伴ふ文の「尚」の前または後に補読す るもの。

原因は、ここにあると考へられるので、以下Aを中心として、スラ

スラを最も多く用ゐるのはAであり、訓点語にスラの多い

即ち

C後に「簟」を伴ふ文の「尚」の前または後に補読するもの。 B後に「云何」を伴ふ文の「尚」の前または後に補読するもの。

D後に「況・何況・云何・寧」などを伴はない文の「尚」の前ま たは後に補読するもの。

F 「尚」がなく、後に「云何」を伴ふ文に補読するもの。 E「尚」がなく、後に「況・何況」などを伴ふ文に 補読 するも

G「尚」がなく、「寧」を持つ文に補読するもの。

以上、 読するもの。 「尚・況・何況・云何・寧」などのない文に、文意によって補 「尚」の代りに、 稀れに 「猶・猶尚」を用ゐることがあ

わたしの集めた用例を分類すると、次の如くである。

る。

第

ダ	ス	
= '	ラ	
9	59	A
0	2	В
1	0	С
1	4	D
0	5	Е
1	1	F
ì	0	G
18	6	Н
31	77	計

る。 か後にあるかによつて、Aを更に次の四種に分けることができる。 見られるものである。それ故、 とダニの用法を調べてみよう。 的判断か、または、対比の中心となるべき語が、 べき語にスラまたはダニを補読する。甲の記述が肯定的判断か否定 A は、 a甲が肯定で、対比の中心となるべき語が「尚」の 前に あるも 叙述の重点は乙にあり、甲は乙を引き出す材料、いはば例とも 「尚」はナホまたはナホシと読み、甲の中の対比の中心となる ある事がら甲を挙げて、 甲にスラ・ダニを含むことになる 他の事柄乙と 対比 する構文であ 「尚」の前にある

b 甲が肯定で、 対比の中心となる べき語 が 尚 の後にあるも

c 甲が否定で、 d甲が否定で、対比の中心となるべき語が 対比の中 心となるべき語が 一尚」の 尚 の前にあるも 後 に あ るも

12

形式的な否定ではないから、次のやうに、文法上は肯定表現に属す ただし、ここで「否定」といふのは、内容的に見た否定であって、

(1)声聞道果 尚燳 。何況有二 仏道一。(大智度論天安点るものであっても、否定として取り扱ふ。

(2) 如 八十六 187 尚不可得 。何況住と如得二阿耨多羅三藐三菩提」。

(3)未来世 未有 。念知 (同 巻六十四 1623) 六十七 2113) することダに 尚難 へ。何況眼 見 **乱 べゃ** (同

巻

くである。 さて、前記Aの例を、右の分類に当てはめて整理すると、 次の 如

ス ラ 2 13 а 2 0 b 3 38 С 6 4 d 9 59 計

後にあるdでは、その差は比較的少いといふことができる。その c・dでは、スラ・ダニが共に用ゐられるが、対比の中心となるべ き語が「尚」、の前にあるcでは、スラが圧倒的に多く、「尚」の 即ち 肯定のa・bでは、 殆んどスラだけが用 ゐられ、否定の

(4) 是<sub>の</sub> 諸法の 1、法相 当 治空なり (大智度論天安点 祝有三 我 而 巻六十二 12 5 決

(6)得二人身1但不2 行2 善尚為二大 失1 。況起」 悪業1。(お) を は なっ (さ) を ま なる (さ) なま を 罪1。(地蔵十輪経元慶点 巻四 7|5) a 生 作 成 応2如2 是 。況犯二 其 余 小(5)犯二 性罪1者 尚 応2如2 是 。況犯二 其 余 小(5)犯二 性罪1者 尚 応2如2 と 。 のの ままには の の

⑦此中 尚与下(中略)諸 外道 欣一求 ・善説・離二 ・慳嫉! (成実論天長点 巻十二 14/6) a 2

(3)我尚知二布施持戒等。恩二 。何況般若波羅蜜 。(大智度論天乗掌珍論承和・嘉祥点 1077) b 別訓 外道とすら 者上 広 興二語論一。何況同

(9)小児 | 遅心 | 尚無 。 況能 | 遅欲。 (成実論天長点安点 巻七十 13|9-10) b

(10) 愚 人 於二 浅近 法二猶尚難レ悟 。 (大智) 変ほ 、で) すら 。 の に 回若諸法 実定 尚不ゝ応ゝ作;貪欲睡恚罪 因縁。。(大智度論天安点 巻一 620) C 尚不ゝ応ゝ作二貪欲腫恚罪 因縁」。何況虚誑 何況甚深

欣楽」。況於二此位」。 27) C(ダモは「初」にではなく、「楽」に添へるべきであら (瑜伽師地論古点 巻二十三 5/25-

明十方世界中尚無三三乗」。何况有> 三。

因

巻十五

諸 菩薩 尚不下烯二求 般涅槃|故 勤 修中梵行上。

況 復欣一楽 二 | 三界||生死||。(大乗掌珍論承和・嘉 祥 点、

3

3行二 布施 輪一、尚 不ン能ン 滅下 自身 所ン有 1512) d の を しず (は) すこと に る ( 苦悩上。 況能 除二滅 でなっ 一切 有情 無量 苦惱」。 ン 少分<sub>の</sub> (地蔵

不り起り心をかに 況当り

(18)若靜訟瞋恚 尚不ゝ得ゝ生ニ 天人 中」 。何况涅槃 祝 邪。 (成実論天長点 巻十二 1123) d

| 括有|| 法相||者 尚不」得||順忍| 。 何祝得」 道。 何祝無上道。 (同 巻六十二 631) は なっている まを くる) こと は 尚不」能 り 得! 小乗 涅槃|| (大智度論天安点 巻八十三 1123) は 小乗。涅槃」。

20)若有二 巻八十七 1|2-3) d

構文である。このやうな場合に用ゐられるものとしては、ダニより で、Aは、甲を例として、乙がそれ以上であることを強く敍述する のことはともかくせめて何々だけでも」といふに近かった。ところ とはいふまでもなく何々さへも」といふ気持であり、ダニは、 ニは、すべてを譲歩した最後の一線を表はした。スラは、「他のこ これについて、わたしは次のやうに考へる。 一、上代のスラは、一事を挙げて他を類推させる意味を持ち、ダ

もスラが相応しい。万葉集に

○夢のみに見尚 幾 許恋ふる吾はうつつに見ては益而如 何からないかにあらむ (巻十一・二五五三)

ラがダニより適切であることを示してゐる とあるのは、国語として最もAに近い表現であり、 Aにおいて、 ス

を表はす語に続き、ダニは、「未定事実に対する表現者の主観的態て」(和十三年六月号)によれば、上代のスラは「確定の事実」また、加納協三郎氏の「『だに』『すら』の用法 上の 差 異に就

実または当然予想さるべき事がらであって、 未 定 事 実や単純な推 度・意向を表はす語」に続いたといふ。ところで、甲は、既定の事

は極めて稀れであるが、それも、ベシ・マジのやうな客観的推量を 定・希望などではない。例へば、甲の中に推量の助動詞を含むこと

ゐられない。 表はすものに限られ、ム・ジのやうな主観的推量を表はすものは用 21般若波羅蜜 品 尚不ゝ能ゝ 談 。何況多 。(大智度

(22) 小信 をすら たすら 尚 不 り得 。何況得二 出家 道果」。 (あら)ズ パイ 巻百  $\frac{14}{10}$ (同

適切である。 このやうな場合に用ゐられるものとしては、やはりスラがダニより 10 13 14 )

れてゐる。ダニは、七十二例中二十一例、即ち約三分の一が否定に用 ることになったのであらう。 一、万葉集の例を見ると、否定には、ダニがスラより多く用ゐら それ故、Aにおいては、全体としてスラがダニより多く用ゐられ

ゐられてゐるが、スラは、二十八例中三例、即ち九分の一しか否定

に用ゐられてゐない。平安朝初期の訓点語でも、完全に補読する場 (小川本願経四分律古点 甲巻 23 2) 23汝云何 治シ 病 乃 使レ無シ 有二 創 処 の か ぶ スラは、六例中二例しか否定を表はす語に続いてゐない。 即ちHを見ると、ダニは、十八例全部が否定を表はす語に続

24斯等 共 一レ (にし)て (妙法蓮華経古点 2/2) 仏の実智で

28外 諸 巧師 受 学 弟子 亦有三 恭二敬 於師」。 点 ののに ケーブー14)。 (り) すること に点 巻二十一 613ー14) 

20仏已 曾世世 連華経与に (にし)で (を) (せ) をおものたるをもちてなり せっ (さ) (の)らを かっ (さ) (の)らを (の 皆一

28 我今自 於智 我今自 於智 ― 疑惑 一不い能い 了 。 (同蓮華経古点 3/25-26) 聴一受 仏語」。(妙法  $\frac{3}{3}$ 別訓

3若後、 因 先、 果 、因 自 未v生。 智二於テスラ 果 、因 自 未v生。 (成実論天長点 巻十七 510) 云何 生レ

限り、 )かくのみや吾が恋ひをらむぬば玉の欲流乃比毛太爾解き放けず、確定事実を表はす語にも続くことができたといふ。 加納氏の前記論文によれば、上代のダニは、否定の場合に 巻十七・三九三八)

すべき例外である。

○たぶれたる醜つ翁の許等太爾母吾には告げず、 同 巻十七·

四〇一二

それ故、Aも、否定の場合には、ダニの用ゐられる可能性があるわ あらう。肯定でダニを用ゐたのは、前掲(6)と、次の例とである。 けであり、従って、肯定のa・bには、殆ん ど ス ラ だけが用ゐら れ、否定のc・dには、スラ・ダニが併用されることになったので 30説下 未悪世 尚 有二 衆生 能生中 中 (き)ハロ にグも し (ら)て くナ (き)ムト 現在 菩薩聞り 説二 般若一而不二 進修一。(金剛般若経の (き)て (<)を (を) らむや (せ) 実相上。況 今

むか分らない。大正大蔵経の校異を見ると、「未+(来)カ」とあ 「未」の右には、白墨で一字漢字が書きつけられてゐるが、何と読 **讃述仁和点 3518-19**)

介

とらしい。「生」の左には反点の「一」が、「説」の左には反点の る。「来」の字を補って「未来の悪世」と読むべきか――といふこ 用例三十一の内、ダニを肯定に用ゐた唯一の確実な例として、注目 に引かれてダニを用ゐたのであらうか。いづれにしても、ダニの全 るが、対比の中心となる「善を行(せ)ぬ」が否定であるため、これ たが、余り確実な例ではない。 ⑹は、全体としては肯定判断であ の意に解し、反点に従って「生」から「説」に 返っ て 読んでおい 「二」があるが、「未」には反点がない。仮りに「未」を「未来」

その前後にスラを補読する習慣が早くから一般化してゐたことを示 ある。これは漢文訓読の際、A・Dのような「尚」をナホと読み、 三、万葉集には、「尚」をナホまたはスラと読ませた多くの例が

ば、スラの直ぐ後にナホ になったのであらう。 がスラとナホとの結合を破って、比較的多くダニが用ゐられること 否定に勝ち、 なり、――ナホ――スラの慣用句は成立しにくい。 それ故、 れにスラを補読しても、両者は常に他語によって切断されることに 心となるべき語が「尚」の前にあるから、 こ れ に スラを補読すれ ――スラ・ナポの慣用句に支へられて、スラとナホとの結合が b では、 ――スラ・ナホの慣用句が成立しやすい。これに対 スラがダニを圧して多く用ゐられたが、dでは、 対比の中心となるべき語が「尚」の後にあるから、こ ところで、 (尚) が来ることになって、両者の関係が Aについて考へると、aでは、 対比の中 C で 否定

ものが訓点資料に頻出すること、この構文にあっては、本来スラが ダニより適切であること、Aの大半を占めるa・cでは、 説明することができ、また、訓点語で、特にスラの多い特殊事情を ダニより圧倒的に多く用ゐられることになったのである。 ことなどのため、上代以来の一般的傾向に反し、訓点語ではスラが も理解することができると思ふ。 わたしは、以上の如く考へることによって、第二表の示す事実を 、ホの慣用句が守られ、 習慣的にスラの用ゐられる傾向があった 繰り返していへば、まづ、Aその ーースラ

の両形があり、 スラモは極めて稀れに用ゐた。 ラニ・スラモの三形があったが、 を含んでゐることを注意しておきたい。上代のスラには、 なほ、第一・第二表のスラにはスラモを、 ダニをダニモより多く用ゐたが、 訓点語では、 (26参照) ダニには、ダニ・ダニモ ダニにはダニモ・ダ スラニは全く用ゐず 訓点語では、 スラ・ス 却っ £

> かに早く現はれてゐる。 モはダニモの音韻変化したもので、 てダニモ・ダモをダニより多く用る、 . 6 比丘尼有り疑、 不下敢な へ (り)てダも 従来考へられてゐたよりも、 その比は四対一であった。 水。 上(8)(元) 厠 | 大小便

(32) に我音 | 不い聞| 仏 名字| 。亦不い聞| 正法| 。 とう (2) をも (3) をも (4) をも (5) をも (5) をも (5) にして (6) まづりのね(音) をけへして あらずして (6) まづりのね(音) をけへして あらずして (6) (麻生文庫本願経四分律古点 247) (4) (麻生文庫本願経四分律古点 247) (妙法蓮華経古 於三千万億劫

(34) \*若有相 (33) 夢 3若有相 行り 施 尚不り得三十王 報! 。百 214) 点 7 5 – 6) の にかも(あらず) てず は たてまつら ま 不 1 と 不 1 と こま 仏 (大智度論天安点 得二 仏 の むや の 菩提

なは、 23の「処ダも」参照

(金剛般若経讚述仁和点

19 14

15

(第一表Cの例

て 関するお説によって導かれたもので ある。 」 (五一―三五五頁) の中で言及され以上述べたところは、春日政治博士が、 次の如くである。 の中で言及された、 「古点の 博士のお説を要約する スラ・ダニの用法に 況 字 をめぐっ

శ్ర せる義で、現代のサヘに当り、 ラを用ゐた例はない。 スラは、 一尚」の前にダニを用ゐた例は稀れにあるが、 「尚」の前にはスラを多く用ゐ、 低度もしくは高度の一事物を提示して、 ダニは、 提示する一事物を限って他 尚 の後にはダニを用 「尚」の後にス 他を推測

後に読み添へるものとしては、本来スラの方が適切であった。を予想しないのが本義で、現代のダケに当る。それ故、「尚」の前

四、ただし、「尚」の前では、スラとナホとの結合が強く、依然況」などを伴ふ「尚」の前後にも、スラに代って用ゐられ出した。の表はしてゐた意味をもダニが表はすやうになって、後に「況・何三、しかるに、平安時代に入り、ダニの使用が増加し、従来スラ

く、ダニは容易にスラに代ることができた。としてスラが用ゐられ、「尚」の後では、スラとナホとの結合が強としてスラが用ゐられ、「尚」の後では、スラとナホとの結合が強く、依然況」などを伴ふ「尚」の前後にも、スラに代って用ゐられ出した。

しくしたことにあるやうである。本稿の論旨を一層明白にするたこ分した上、更に、肯定と否定との区別を導入して、分類をより詳たが、今これを整理してみると、すでに述べたやうに、博士のお説にとは、幾分異なる結果が現はれた。このやうな相違を齎した主な原とは、幾分異なる結果が現はれた。このやうな相違を齎した主な原とは、幾分異なる結果が現はれた。このやうな相違を齎した主な原とは、幾分異なる結果が現はれた。このやうな相違を齎した主な原とは、幾分異なる結果が現はれた。この説を読んで、始めて訓点語におけるスラ・ダニのわたしは、この説を読んで、始めて訓点語におけるスラ・ダニのわたしは、この説を読んで、始めて訓点語におけるスラ・ダニのわたしは、この説を読んで、始めて訓点語におけるスラ・ダニのわたしは、この説を読んで、始めて訓点語におけるスラ・ダニの

続貂」(要第十二集)に、西大寺本不空羂索神呪心経寛徳二年点かるです。
は、否定の場合に限るのであり、肯定の場合には、却ってスラを用で、やはりスラが多い。それも、 ダニ が 比較的多く用ゐられるの集めた例では、「尚」の後に用ゐられるものは、スラ八、ダニ四後にはダニを用ゐてスラを用ゐないといふのは誤りである。わたし人、「尚」の前にスラを多く用ゐるのは事実であるが、「尚」の一、「尚」の前にスラを多く用ゐるのは事実であるが、「尚」の一、「尚」の前にスラを多く用ゐるのは事実であるが、「尚」の

博士のお説に対し、敢へて批評を試みさせて頂かうと思ふ。

○是(の)如き衆生、斯の呪力に由て尚し現に軽受(し)て、重(訓)

呪や余の有情の身心清浄にして此の呪を開

せむ(は)而も福を獲サラへムコ不ヤ。

罪をスラ消除す。

ってゐる例と見られる。 するもので、当然スラが用ゐらるべきであり、むしろよく古用を保されたための誤解ではないか。これは、わたしの分類では、bに属とある表現に反する。」(五五頁)とあるのは、博士のお説を踏襲とめる表現に反する。」(五五頁)とあるのは、博士のお説を踏襲の例を引き、『尚』字の下にスラが用ゐられており、古用のダニ

**ゐられる可能性があった。** 二**、Aの構文においては、博士のお説のやうに、意義上**スラがダ

た」ためではなく、むしろ、ダニ本来の用法として、否定の場合にの推移に伴って、ダニの意味が変化し、「スラの 位置 を 奪ひ尽し用あらるべきである。しかるに、実際には、ダニは、肯定には殆ど用あられず、主として否定に用ゐられる傾向がある。これは、時代用ゐられが、もしさうだとすれば、ダニは、肯定・否定の区別なくこの使用が増加し、ダニがスラの意味を兼ねるやうになった結果と三の使用が増加し、ダニがスラの意味を兼ねるやうになった結果と三の使用が増加し、ダニがスラの意味を兼ねるやうになった結果と三の地が増加し、ダニ本来の用法として、否定の場合に

おける両者の勢力比を、比較的忠実に示してゐるものと考へ、平安は、Hに見られるスラ六、ダニ十八の開きが、訓点語以外の国語に受けないHの十八例全部が否定で あ る こ とに注意したい。わたし例三十一、その内二十九までが否定であり、殊に直接原文の影響を限りAの中に入り込むことができたと解すべきである。ダニの全用

だスラの位置を奪ひ尽すに到らず、なほ用法上の相違を保ってゐた てゐないが)、ダニがスラを圧して多く用ゐられてはゐたが、いま 朝初期にあっては(点本以外の国語資料は、実際には殆んど現存し

明であり、わたしもこれに従った。 ダニが入り込むのに難易の差があるといふのは、 「尚」の前と後とでは、ナホとスラの結合の 度合が違ふか 首肯すべき説

と想像する。

五、聖語蔵本菩薩善戒経古点から引かれた

中に加へてゐられないのは不審である。 のであらうか。ただし、博士自身、ダニを「尚」の前に用ゐた例の のダニにはなかった用法で、ダニがスラに代り始めたことを示すも は、⑥と共にダニをaに用ゐた注目すべき例外である。確かに上代 ○少物ダニ尚シ施ス。何ニ況ャ多有ラムヲハ•(二九二・三四九頁)

た賜である。 ころがあるとすれば、それは、偏へに博士のお説によって啓発され 能な範囲で用例を集める他なかった。それにも拘らず、本稿が、 ところ、どうにもならないことなので、わたしはわたしなりに、可 ら、その中にどんな例外が潜んでゐるか分らない。しかし、目下の 扱ったものはその一部に過ぎず、調査すべくして調査 でき なかっ 点語のスラ・ダニの用法を明らかにするために、少しでも役立つと た資料も少くない。殊に、正倉院関係のものは全く 未 見 で あるか 初に記したやうに、平安朝初期の訓点語といっても、本稿で取り

わたしは、 「博士にとっては、 先に、春日博士の「古訓点の研究」の書評を書かせて 出席簿に載らざる学生である。」と

> ŋ 御指導を仰いだ一人として、このおめでたい誌上に、拙文を載せて頂 取り扱ひを、細々とお教へ頂いた時のことなど、わたしは、今もそ 馬屋谷のお宅に参上し、故大矢透博士から引き継がれた資料や、博 演――国語資料としての訓点の位置――を拝聴した時のこと、卒業 くことは、まことに光栄であり、無上の喜びである。山陰の水都よ これを記念して本誌が特輯されることになった由であるが、博士の 教授からのお手紙によると、博士は今年八十の賀をお祝ひになり、 の日と同じ感激をもって思ひ出すことができるのである。福田良輔 士自らお集めになった資料などについて、点本の調べ方と訓点語の 論文の作製に当り、禁止詞 マ ナ の 語序についてお伺ひしたのに対 いった。実際、わたしは、京都大学在学中から、二十 数 年 に亘 遙かに、博士の御健在をお祈りし、変らざる御指導をお願ひし 懇切丁寧な御返事を頂いた時のこと、また、朝鮮からの帰途、 博士の御指導を仰いで来た。京大楽友会館で、始めて博士の講

付記一、本稿で点本を引用する場合には、本文の文字はすべて現 この稿を了る。 が行数を示す。 ほ、用例の出典を示す分数は、分子が料紙の枚数を、分母 を ( ) で包んで表はし、反点も後世の形式に改めた。な 行の活字体に改め、ヲコト点は平仮名、仮名訓は片仮名、 実字は平仮名の右に傍線を引き、私意による補読は平仮名 一島根大学教授一

一、本稿は、昭和三十三年十一月二十三日、広島大学文学部 初期の訓点語に伝へられた上代の文法」の一部を詳説した で開かれた国語学会中国四国大会で行った講演、 昭和三十四年十一月十五日記